ファインスチール　第69巻　4号　通巻616号　1、4、7、10月25日発行　令和7年10月25日発行　ISSN1348−494X

ファインスチール

Fine Steel

Autumn 2025
秋

CONTENTS

01 特集1
「沿線まるごとホテル」プロジェクト
Satologue.

05 特集2
EXPO'70 パビリオン

07 ファインスチールを使った 建築設計例　353
池上の家
空につながる・・・ ———
設計：中村 俊哉 ＋ 藤井 愛／ship architecture

11 建築めぐり
ウォートルス伝 37　丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例　その61

一般社団法人 日本鉄鋼連盟

特集 1

「沿線まるごとホテル」プロジェクト(※)

Satologue.

～土地に住まう人、訪れる人と共に奥多摩の「里の物語」を紡ぎ続ける～

設計：堀部安嗣建築設計事務所 ＋ NIa

今号の特集1では、全国各地で地域活性化やビジネス創出を支援する株式会社さとゆめと、JR東日本の共同出資会社「沿線まるごと株式会社」が取り組む、「沿線まるごとホテル」プロジェクトの中核施設となる「Satologue」をご紹介します。

2017年春号（4月発行）の建築設計例321「北杜の家」を設計された堀部安嗣氏が「Satologue」の設計を担当されました。

©Daisuke Takashige

沿線まるごとホテル「Satologue」とは

東京の立川駅から奥多摩駅までを結ぶJR東日本の青梅線、その中間地点である青梅駅から終点の奥多摩駅間の沿線全体をホテルとして見立てていく「沿線まるごとホテル」プロジェクトの第一弾が、Satologueである。青梅線の無人駅をホテルのフロントに見立て、沿線に点在する民家などをホテルの客室として利用し、青梅線はさながらエレベーターのようなホテル内の移動手段となる。地域の住民もコンシェルジュのような役割を担い、それによって沿線地域を活性化させていく。

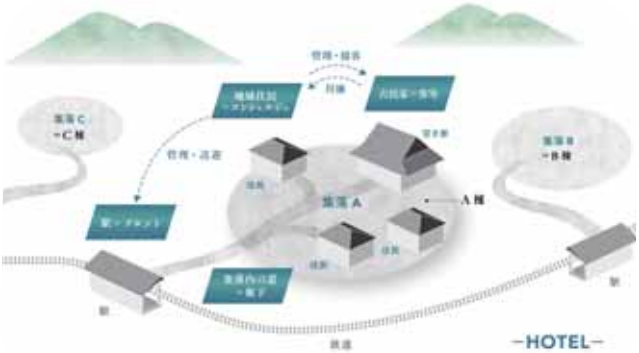
（堀部安嗣氏／「新建築」2025年7月号より抜粋）

©Daisuke Takashige

宿泊棟およびレストラン棟南側外観。

「沿線まるごとホテル」プロジェクト とは

駅とその周辺の集落に点在する地域資源を”編集”し、地域全体を“一つのホテル”に見立てた世界観をつくりだすプロジェクトです。JR東日本の駅舎や鉄道施設などを「ホテルのフロント」として活用、沿線集落の古民家（空き家）を「ホテルの客室」に改修、さらには地域住民を「ホテルのキャスト」として接客・運営を行うことで、「沿線」を「まるごと」楽しめる「ホテル」の世界観を構築し、新たな滞在型観光及び、沿線の地域活性化を図るものです。



「Satologue」の敷地

Satologueの敷地は道路から多摩川の土手に向かって降っていく急斜面にある。ここには築約120年の民家、廃屋となった納屋、時代と共にその役割を終えた養魚所などが点在しており、これらをリノベーションしてレストランやラウンジ、薪サウナ小屋、自家菜園やビオトープなどに生まれ変えていくことから工事を着手して、2024年5月にレストランと薪サウナがプレオープンした。そしてレストラン営業と並行して宿泊棟を整備し、2025年5月に宿泊のための施設が揃って、ホテルとして正式に開業することとなった。

（堀部安嗣氏／「新建築」2025年7月号より抜粋）

大正から昭和初期の頃、ここは木材の集積所「土場」だった。

庭にあった巨大なコンクリート建造物は、養魚用の生け簀。

奥多摩では今でも、切り揃えられた薪が庭先に並べられている。

Restaurant「時帰路 ときろ」

ふるさとへと、心が帰る路となる。

施設全体の顔となるレストラン棟は多摩川の上流を眼下におさめる眺めのよい場所にある。ここでは約120年前の柱梁を利用し、南東側の一部に貫を加えて建物の構造に“粘り”を持たせながら新旧のさまざまな形質の材木が織りなす空間をつくった。メインの客席は掘り炬燵形式にして重心を下げ、庇を新たに設置して風景を印象的に切り取り、あたかも奥多摩の自然に身体が溶け込んでいくような感覚を味わえるようにした。

（堀部安嗣氏／「新建築」2025年7月号より抜粋）

レストラン棟2階、窓側の掘り炬燵式のカウンター席より多摩川を見下ろす。

塗装ガルバリウム鋼板製屋根のレストラン棟正面玄関。

ラウンジで移ろいゆく夕景を楽しむ。

地元の多彩な食材をふんだんに使用した沿線ガストロノミー。

Rooms「空間 くうかん」

お部屋の名前は、その部屋の窓から見える木々の名から。

宿泊棟は道路レベルにあるレストランから一段降った場所に位置し、多摩川に至る傾斜地の懐にすっぽりと収まるような佇まいにして全4室を配置した。客室は奥多摩の自然への開放感も大切であるが、時には厳しい自然から身を守ることができる環境も大切にし、断熱気密性能を高め、そしてやわらかく包まれるようなヴォールトの漆喰天井が特徴的な客室とした。一方、開放感を味わいたい時には半戸外のテラスに出て、多摩川からの風や音を存分に楽しむことができる。ここは虫よけの網戸と風や埃を防ぐためのシングルガラスを設けてテラスの稼働率を上げる試みをした。

（堀部安嗣氏／「新建築」2025年7月号より抜粋）

客室から見える木々は「柳、杉、欅、桜」。

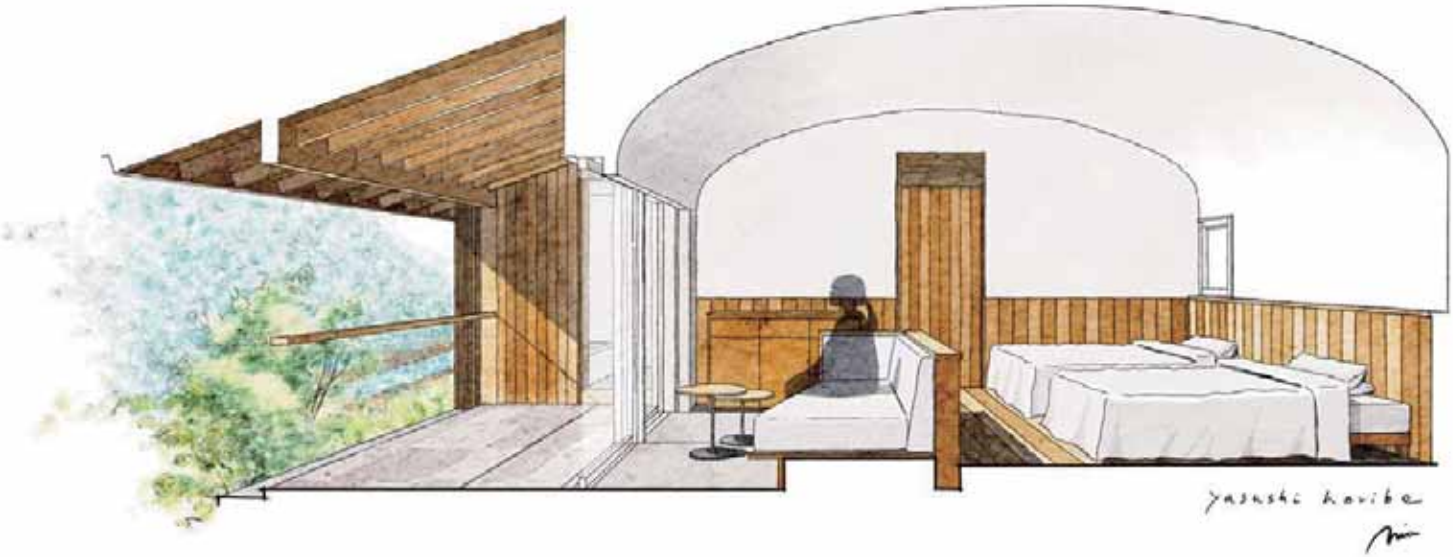
繭に包まれるようなツインルーム。

川と自然を眺めるお風呂。

客室は、旅人の心が落ち着き安心して帰れる居場所。

奥多摩の自然を五感で感じられるテラス。

リラックスできる滞在着。



Wood Sauna「風木水 ふうきすい」

「これは世界遺産ですね」
堀部安嗣氏が冗談まじりにそう言ったのは、
敷地内に佇んでいたコンクリートの物置小屋だった。

薪サウナ小屋は宿泊棟よりさらに一段降った場所にあった納屋を利用した。新しく木造の下屋をつくり、川の清冽な水を引き込んだ水風呂を設置した。さらに庭を整備していくつかの外気浴スペースをつくり、川や滝の冷気や音を心身で満喫できる場所をつくった。

（堀部安嗣氏／「新建築」2025年7月号より抜粋）

既存鉄筋コンクリート造の建物を薪サウナに改修。

最大4人収容可能なサウナルーム。

緑につつまれた外気浴フィールド。

サウナの要素「薪」「水」「空気」を全身で楽しむ。

Landscape「庭 にわ」

Satologue（さとローグ）とは

さと（里・郷）と、話を意味するローグ（_logue）を掛け合わせた造語。

里の人と出会えば、「会話＝dialogue」が生まれるかもしれない。
自然やくらしにふれて、「自分との対話＝monologue」が
深まるかもしれない。
あるいは、ただただ土地の空気感に包まれて非日常の
「空想＝ideologue」に浸れるかもしれない。
里のストーリーをひもといて、「対話＝logue」を創り出すこと。
そしてここに来るすべての人が、里に宿る情緒を感じ、
それぞれの形でローグ（_logue）を楽しむこと。

それが、Satologueが目指す世界です。

特集 2

EXPO' 70 パビリオン

日本開催では過去最多の158カ国・地域が参加した大規模万博「大阪・関西万博 EXPO2025」が10月13日、大盛況のうちに幕を下ろしました（関係者を含む総来場者の合計約2901万7900人）。
今号の特集2では、同様に55年前に日本中の人々を熱狂させた「日本万国博覧会（大阪万博）」に当時、一般社団法人 日本鉄鋼連盟の出展施設であった「鉄鋼館」を利用し2010年3月13日にオープンした、同博覧会の記念館「EXPO' 70 パビリオン」をご紹介します。

写真提供：大阪府

本館

常設展示室

1. EXPO' 70への歩み
2. 史上最大のプロジェクト、始動！
3. 無限の可能性を秘めた音楽堂
4. 空前絶後の記録づくし
5. 6400万人の実験都市
6. パビリオン☆パビリオン
7. 体感する、人類の進歩と調和
8. 会場に咲く花、ホステス
9. 世界の国からこんにちは
10. 夢がつまった、子どもの天国
11. バックステージの1500人
12. ペーパークラフト（大阪万博会場模型　縮尺1/300）
13. EXPO' 70コレクション
14. Made in EXPO' 70 ~すべては万国博から
15. 今も生き続ける万国博

スペースシアター

建物自体が楽器という旧鉄鋼館のテーマは今見ても斬新なデザインと発想をもっています。大阪万博当時の鉄鋼館は、テーマが“鉄の歌”で、展示作品には鉄を使った芸術的な楽器もありました。このスペースシアターと呼ばれたホールには、大阪万博当時の最新技術が集結した音響システムが導入され、1008個ものスピーカーから流れる音楽とレーザー光線によるショーが人気を集めました。
大阪万博閉幕後は、閉鎖し未公開となっていましたが、2010年に約40年の時を経て公開。2014年3月からは、より当時を彷彿させるダイナミックな演出へと一新し、当時の様子をリアルに体感できる内容となりました。

※ホール内には入れません。ガラス越しのご観覧となります。

■ 別館

増設された「別館」はこれまでの常設展示に加え、大阪万博開催時に太陽の塔の頂部に設置されていた「黄金の顔」の展示や、映像で当時を体感できるゾーン等を新たに設置し、2023年8月11日より一般公開しています。

▌常設展示室

1. 「EXPO' 70」デザイン新時代
2. 「人類の進歩と調和」1970年が見た近未来
3. EXPO' 70体感ギャラリー
4. 「生命の樹」太古から連なる生命のエネルギー
5. 未来を表す「黄金の顔」

▌野外芝生広場（中庭）

お祭り広場から現在の太陽の広場に架けられていた大屋根の模型やEXPO' 70モニュメントなどフォトスポットとして楽しんでいただけます。

■ 利用料金（常設展観覧料）

一般

大人（高校生以上）	500円
中学生以下	無料（保護者同伴にて）

団体（20人以上～199人以下）

大人（高校生以上）	400円
中学生以下	無料（保護者同伴にて）

団体（200人以上）

大人（高校生以上）	350円
中学生以下	無料（保護者同伴にて）

※別途、自然文化園・日本庭園共通入園料（大人260円 小中学生80円）が必要です。
※特別展等実施の時は、別途料金が必要となる場合があります。

■ その他

●開館時間

10:00～17:00（入館は16:30まで）

●休館日

毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）／年末年始
※4月1日～5月2日まで・10月・11月は無休（万博記念公園に準ずる）

●お問い合わせ先

万博記念公園コールセンター

電　話：0570-01-1970 / 06-6877-7387
時　間：9:30～17:00
定休日：水曜日（万博記念公園に準ずる）

日本万国博覧会（大阪万博）の詳細は下記URLより
https://www.expo70-park.jp/cause/expo/

ファインスチールを使った
建築設計例 353

池上の家

空につながる・・・

設計：中村 俊哉 ＋ 藤井 愛／ship architecture

（撮影：表紙、P7～8の写真は新建築社写真部撮影ⓒ その他は、太田拓実氏撮影ⓒ）

東京都大田区池上は中世から続く池上本門寺の寺町として住み続けられてきた歴史と伝統のある町だ。観光地ほどの派手さはなく、程よく活気のある商店街もあり気取らない住宅地が広がる。

今回紹介する「池上の家」は中村俊哉・藤井愛両建築家の作品である。施主は中村氏の友人であり、対象の敷地には元々は友人の妻の祖母の家があった。友人の妻は学生時代をこの祖母宅に下宿していたということもあり思い出のある土地である。また施主夫妻の海外赴任に伴い、現在は設計者である中村・藤井建築家夫妻と小学生と未就学児の家族四人でアトリエ兼自宅として使用している。

周辺環境

駅から続く商店街を抜けると、敷地周辺には小さな商店や町工場が点在するどことなくノスタルジックな雰囲気が漂う住宅地だ。北側を前面道路に接し、ほぼ11m角の正方形にちかい敷地は西と南側には建て替えられたばかりの5階建ての集合住宅、東側には古くからある戸建て住宅に隣接する。この5階建ての集合住宅は「池上の家」に面する壁には開口部はなく視線が気にならならず、建物も敷地境界からセットバックして配置されており圧迫感はない。また東側の隣家には南面に高木の生い茂った庭が残されており、隣家に囲われた南面は開放感のある抜けのある空間となっている。

設計コンセプトと空間構成

はじめに周辺環境と建物デザインの取り合わせを検討し、町への溶け込みを考えた。この町への溶け込みは外観デザインのまちなみとの調和だけではなく、外部環境を生活環境である室内空間への取りこむことまで含まれている。

そこから町のイメージとして、現在は減ってしまった周辺の「町工場」の雰囲気のある空間、外部環境との繋がりを演出する「庭」をコンセプトにした住宅とした。

北側外観。

屋根庭。軒は南側1300mm、西側1900mm。

外観

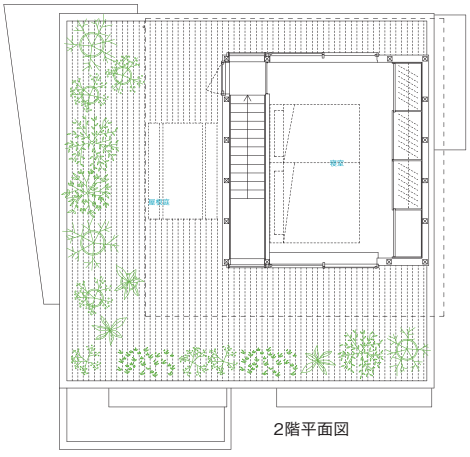
塗装ガルバリウム鋼板で覆われた外観デザインは開口部の少なく極めてシンプルである。また北側の道路からから見るとペントハウスの屋根はガルバリウム鋼板で覆われた建物の上に「フワッ」と空に浮いているようにみえる。一方、玄関は道路面ではなく東側の隣家に接する路地のような空間にあり、それもまた壁面のシンプルさを際立たせている。

内部空間

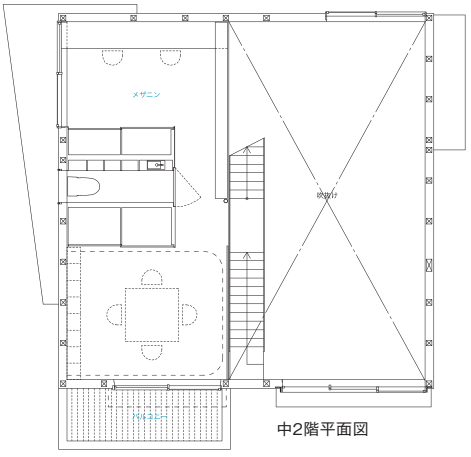
■一階

玄関を入ると外観からは想像の出来ないおおらかな室内空間が広がる。キッチンとダイニングルームは土間となっており、南面の開口部に面して板の間のリビングルームがある。一階の空間の中央には鉄製の軽やかな階段がある。室内はモルタルの土間、粗目の漆喰の壁、木毛セメント板の天井と町工場をイメージした素材で構成されている。

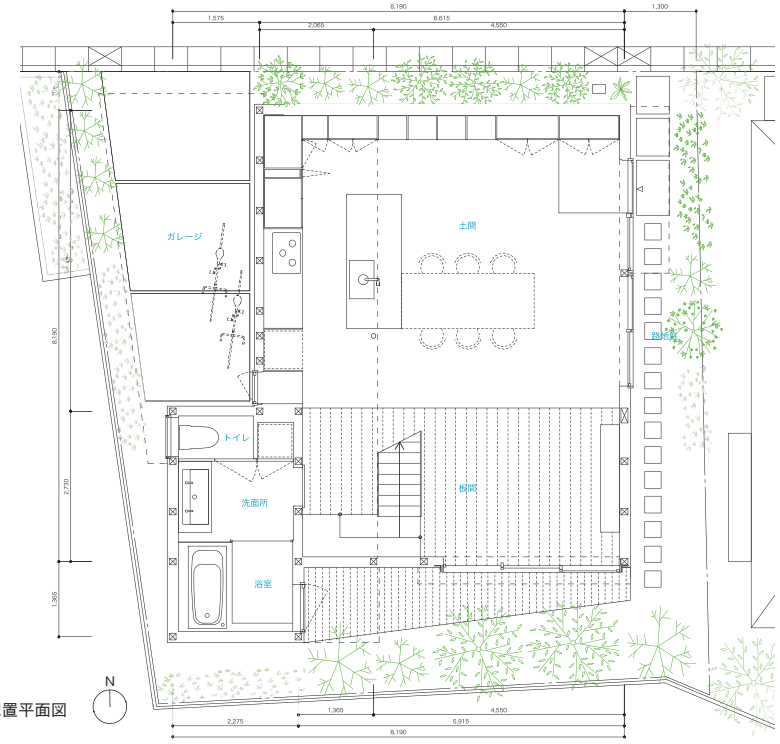
一階の天井高は隣家の軒高と同じ4,850mm、そして同じ高さの開口部があり



2階平面図



中2階平面図



1階配置平面図

左に板間、右に土間を見る。土間をオルタナティブスペースとして活用しており、演奏会やアーティストの個展、料理教室などを開催している。

ダイナミックな空間となっている。開口部の先には玄関から続く路地のような空間があり、さらに隣家の庭を見ることができる。その南面の抜けた空間の向こうには空が見える。

またリビングルームの隣にはガラス製の濃い水色のタイルが施された配されたバスルームがある。

■メザニン

キッチンとバスルームの上には中二階がある。このメザニンはバルコニー的存在で壁はない。現在は建築家夫妻のアトリエとして使用しているが、天井には空間を仕切ることのできるカーテンレールも施されており子ども部屋などの個室とすることもできるという。

■ペントハウス

中二階から階段を上ると二階に辿り着く。この二階には寝室と屋上がありペントハウスという位置づけだ。二階の寝室は親子4人のプライベート空間であり、さらに屋上も生活空間として活用されている。

■階段

室内のほぼ中央にあるスケルトン階段は中二階を経て、そのまま一直線で二階のペントハウスまで続く。鉄骨の重さを感じさせないデザイン、段板の隙間から差し込まれる光により室内空間のダイナミックさを演出する効果を感じる。

階段を上っていくワクワク感は中二階までは鳥瞰的に下階を見ることができ、さらに上に進むに連れて視線は上に行き外の光を感じることでさらに増す。この階段により室内空間だけではなく、外部環境との繋がりを感じることもできる。

庭

■路地空間

玄関から続く建物に沿った帯状の空地は路地庭として室内と外部環境とを繋ぎ、明るく風通しもよい。低中木の樹木と人が通れるようになっており、この路地庭を通って泥だらけの子どもたちが室内を通らずにバスルームに直接行けるようにもなっている。

■屋上空間

屋上にも庭がある。ここには檸檬や金柑屋は八朔などの柑橘系のほか、ブルーベリーや桃などの木もあり四季折々で果物が収穫できるという。またバジルやピーマンやトマトなどの野菜も育てており、蝶々などの昆虫も訪れ、都会にいながら自然に触れられる環境だ。さらに屋上には木製のテーブルもあり家族で食事をしているという。

周辺の高層ビルなどもなく屋上からの眺望は良く、空との距離が近く感じられる。

このように「池上の家」は『たっぷりとした気積』を基本とした空間構成とその気積に対して多方向から光や風が入ってくる室内空間、そして地や空を感じられる自然との繋がりを大切にした庭（外部空間）、室内空間だけではなく隣家との空間の抜けにより視界が遮られない、周辺環境と室内環境の関係が特徴的な住宅である。

ガルバリウム鋼板の魅力

中村氏と藤井氏はガルバリウム鋼板をよく用いるという。その理由として視覚的に軽やかであり、木造建築の仕上げ材として優れているということだ。また今回の作品ではシルバーの塗装ガルバリウム鋼板の中でも植栽が映える、緑色が溶け込めるものを吟味して選んだと話してくれた。シルバーはニュートラルな色で曖昧であり周辺環境に馴染みやすいと話してくれた。外部環境や植栽やその他の要素の色との調和を「色が溶ける」と藤井氏は表現した。

＊

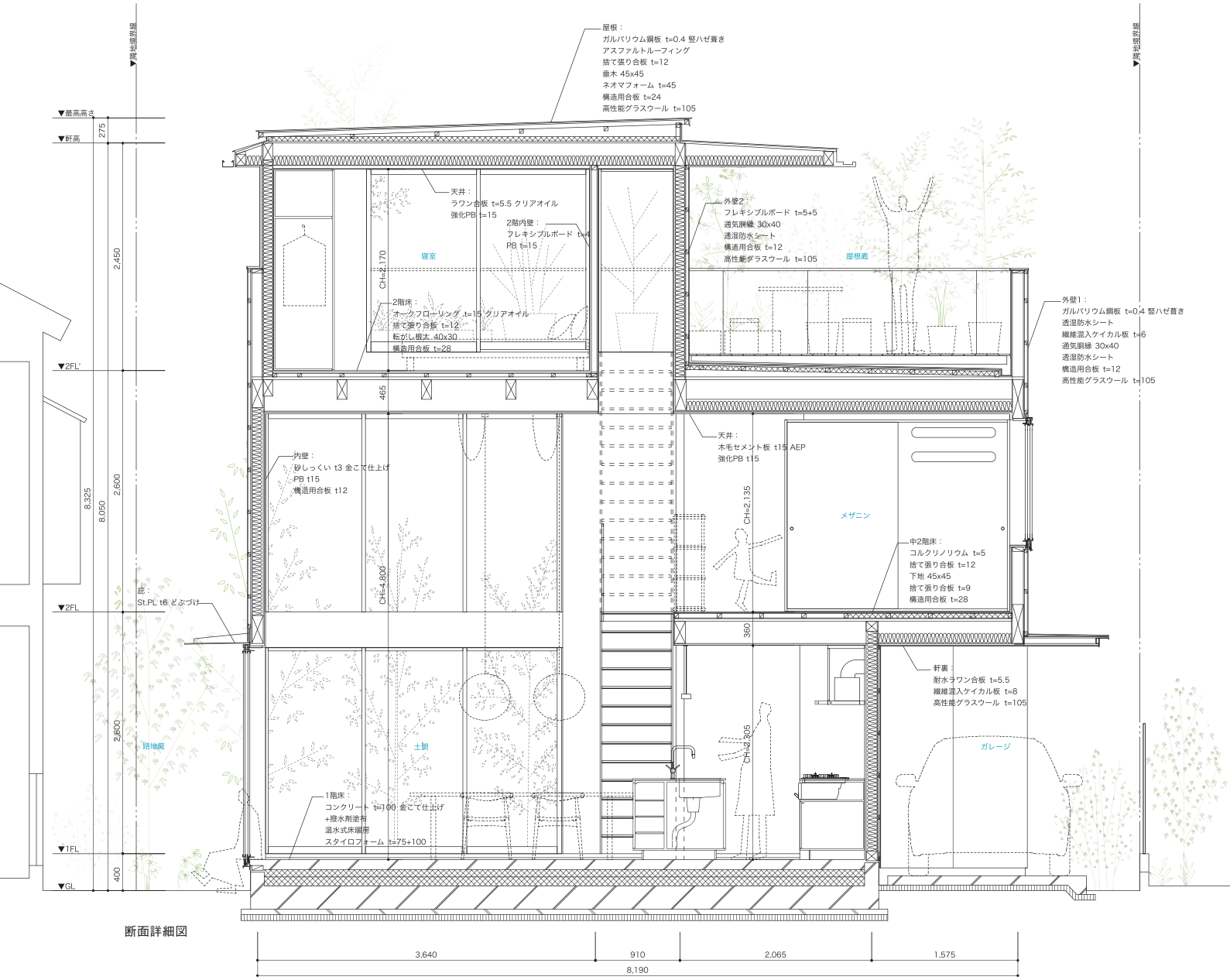
「池上の家」を通して両建築家の周辺環境や住まい手だけではなく建築材料の選定など細やかな配慮に基づいた建築設計の大切さを改めて感じた。

中村氏は設計において町からヒントを得ることが多いという。「町は時間的な流れ

が緩やかだが、建物はそれに比べると時間的な流れが速いと感じる。これまでは周辺の環境から検討する他律的な設計であったが、これからは他律的な考え方と併用して、町の歴史やで文化を継承しつつ、周辺環境に影響されにくい自律的な建築の在り方も考えたい」という思いを、藤井氏もまた「土地や場所に備わった魅力や質を抽象化しつつ空間に落とし込むことで、ひとつの建物を超えた開放感をもつ建築を考えたい」という思いをそれぞれ語ってくれた。

町と対話しながら理想の建築を追求し続ける建築家夫妻の今後の作品も楽しみである。

土間より路地庭および板間を見る。東側と南側に大きな開口を設け光を取り込む。



断面詳細図

設計：ship architecture Inc.／中村 俊哉 + 藤井 愛
一級建築士事務所シップアーキテクチャー合同会社／〒146-0082 東京都大田区池上
[tel&fax]03-6303-5979　[e-mail]office@nf-a.com　[URL]http://nf-a.com/
レポーター：東京大学 大月研究室　深見 かほり

建築めぐり

ウォートルス伝 37

アーネストが関与したテルライドの鉱山(2)

藤森研究室

担当 丸山 雅子(もとこ)

1884年3月にシェリダン鉱区(The Sheridan mine)の売却を成功させたアーネスト・ウォートルスは、サンフアン地方でたちまち評判の人物となった。同年5月、ドロリス郡リコの新聞はこう書いている。

「J・H・アーネスト・ウォートルスは大変な人気である。シルバートン(サンフアン郡)、ユーレイ(ユーレイ郡)、そしてテルライド(サンミゲル郡)のいずれもが彼を自分たちの町の住民だと主張し、それぞれの新聞がちょっとした論争を繰り広げている(J. H. Ernest Waters ... is evidently in great demand. Silverton, Ouray and Telluride each claim him as a resident, and the papers of those places are having quite a little controversy over the matter.)」(注1)

記事の結びでは、町の快適さを誇りつつ、冗談めかしてアーネストをリコに誘っている。

そんな彼の次の一手は、隣接する鉱区を手に入れ、シェリダン鉱区と合わせて大規模な開発を進めることだった。

(2)メンドタ鉱区(The Mendota mine)

メンドタ鉱区(The Mendota mine)は、1878年11月に設定された鉱区で、マーシャル盆地の北端部、現在のテルライド(当時の町名はコロンビア)から北東へおよそ5マイル(約8キロメートル)の地点に位置する。標高は低いところで12,400フィート(約3,780メートル)、高いところで13,600フィート(約4,150メートル)に達する。広さは、一般的な採掘権に従い幅300フィート、長さ1,500フィート(約91メートル×約457メートル)である。(注2)

南はシェリダン鉱区に、北はユーレイ郡のフンボルト鉱区に接しており、いずれもスマグラー鉱脈(シェリダン鉱脈とも)上にある。鉱脈が岩に覆われていたため、シェリダン鉱区のすぐ北にありながら発見は遅れた。発見したのはシェリダン鉱区で働いていた鉱夫たちであり、アーネストが取得するまでのあいだ、彼らによって活発に操業されていた(注3)。

マーシャル盆地を代表する4つの鉱区、北からメンドタ、シェリダン、スマグラー、ユニオン(図1)は、アーネストが関わる以前から、いずれも高く評価されていた(注4)。もしこれら4鉱区を最初から一括して開発できていれば理想的だったろう(注5)。だが、巨額の資金を一度に投じるのは容易ではなかった。さらに、鉱脈が深部で途切れるのではないかという懸念もあった。そのためアーネストは、まずメンドタを、ついでスマグラー、ユニオンを順に取得していくことになる。

シェリダン鉱区を購入してからわずか半年後の1884年10月、アーネストは隣接するメンドタ鉱区の「売買予約権(一定期間内に買い取る権利)」を取得した(注6)。もっとも、実際の売却が成立するまでにはおよそ3年を要した。

そのあいだシェリダン鉱区では、採掘と出荷が続く一方で、大きな変化が進行していた。鉱石の貯蔵小屋や選別小屋、宿舎、その背後に石炭小屋など堅固な建物が次々と建てられた。これらの施設は雪覆い(snow shed)でつながれ、雪崩や吹雪から作業員を守る構造となっていた。鉱夫たちは嵐にさらされることなく仕事場と宿舎を往復でき、地上施設が雪覆いによって一体化し、屋内通路のように機能していた(注7)。

一方のメンドタ鉱区では、シェリダン鉱区の上部坑道を通じて操業が行われていた。両鉱区は坑道を共有し、採れる鉱石の性質も量もほとんど同じであった(注8)。すなわち、シェリダンとメンドタは地質的にも実質的にも一続きの鉱体をなしており、早くから一体的に運用されていたのである。

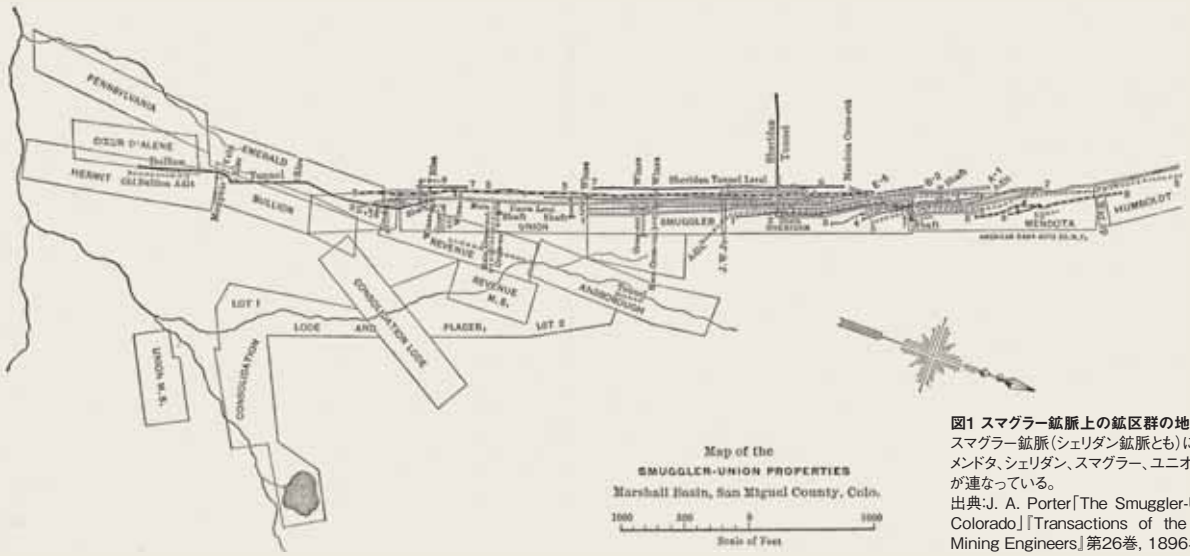


図1 スマグラー鉱脈上の鉱区群の地図(1896年)
スマグラー鉱脈(シェリダン鉱脈とも)に沿って、標高の高い順に、メンドタ、シェリダン、スマグラー、ユニオン、'76、プリオンの各鉱区が連なっている。
出典:J. A. Porter「The Smuggler-Union Mines, Telluride, Colorado」『Transactions of the American Institute of Mining Engineers』第26巻, 1896年, 457頁.

アーネストの経営方針を語るうえで欠かせないのが、彼が「リース制度の支持者（a believer in the leasing system）」であった点である（注9）。これは、鉱区の一部を外部の採掘者に貸し出し、一定のロイヤルティ（使用料）を受け取る仕組みである。サンミゲル郡では、この制度が1886年の銀価暴落を契機に広まったとされる（注10）。会社が直営するよりも、採掘のリスクとコストを契約者に委ねることで、経営側は安定した収益を得ることができた。一方、リース契約者は他人の鉱区を借り、自らの裁量で操業を行い、成功すれば大きな利益を手にできた。双方にとって利点のある合理的な制度であった（注11）。

1886年9月、シェリダンでは大規模な鉱山リース契約が結ばれた。ウォートルスは「借り手に利益が出るなら、会社も同じように儲かるはずだ」との批判を退け、リース制度による収益は直営の場合を約8パーセント上回ると試算した。契約者はいずれも熟練した鉱夫であり、鉱区を最大限に稼働させる能力を備えていた（注12）。こうした経営方式はやがてマーシャル盆地全体に広まり、リース制度が定着することになった（注13）。

1887年3月、上海のリンガー商会で開かれたシェリダン鉱山会社の株主総会では、ウォートルスの経営手腕によって業務効率が大幅に向上し、前年に続いて高配当が実現したことが報告された（注14）。この席では、彼が提案した大規模なクロスカット・トンネル建設計画についても検討が行われた（注15）。

そして同年7月、ようやくメンドタ鉱区の売却が成立した。アーネストとJ・A・ポーターが仲介に入り、在上海の英国人投資家たちが、鉱区の所有者2人に、25万ドルを、ほぼ全額を現金で支払った（注16）。2人は9年前、この鉱区を発見した当時、「郵便切手を買う金さえなく、持ち金のすべてを冬の食料に費やしていた」と語っている（注17）。その彼らが大金を手にしたことを、テルライドの誰もが祝福した（注18）。

司公水來自洋上
Shang-yang Sze-lai-sui Kung-sz
SHANGHAI WATERWORKS COMPANY, LD.
Pumping Station, Yangtszepoo Road.
Directors—A. MacLeod, H. R. Hearn, R. Mackenzie, J. M. Ringer
Secretaries—Drysdale, Ringer & Co.
Engineer-in-chief—A. P. Wood
Foreman Plumber—F. Clifton
Clerk—T. Wallace
Overseer—D. Main

SHERIDAN MINING COMPANY.
MENDOTA MINING COMPANY.
Drysdale, Ringer & Co., secretaries

図2 1890年版の住所録に掲載されたシェリダン鉱山会社およびメンドタ鉱山会社
上海の商人J・M・リンガーは、シェリダン鉱山会社の株主の一人であり、株主総会で議長を務めることもあった。1890年7月にはテルライドを訪れ、アーネストの案内で鉱区群を視察している（注21）。なお、彼は長崎で商人として活動したF・リンガーの兄にあたる。
出典：『The Chronicle & Directory for China,Corea, Japan, the Philippines, Indo-China, Straits Settlements, Siam, Malay States, &c. for the year 1890』

当時の中国の住所録を見ると、上海の項に「Sheridan Mining Company」と「Mendota Mining Company」が並んで記載されている（図2）（注19）。しかし実際には両鉱区は隣接しており、合わせても幅300フィート、延長3,000フィートにすぎない。アメリカの新聞では「Mendota Mining Company」という社名はほとんど見られず、多くは「シェリダン社がメンドタを取得した」と伝えている。経営陣と株主がほぼ同一で、アーネストが両鉱区のマネージャーを兼ねていたためであろう（注20）。

こうしてシェリダンとメンドタは、名実ともに一体化した。所有権はシェリダン社にあり、操業はリース契約者が担うという経営形態のもとで、ウォートルスは両鉱区を統括する立場となった。日々の採鉱と出荷はリース契約者に任せ、自身は広域的かつ長期的な計画、シェリダン・クロスカット・トンネルの建設、深部立坑の掘削、選鉱場の買収と整備、そしてクロスカット坑口から選鉱場を結ぶ路面軌道の建設に専念できたのである。

1880年代のマーシャル盆地で最大の課題は、冬期の雪崩被害、そして鉱石の搬出と物資補給の両面における輸送手段の確保であった。ウォートルスはこれらの難題に対し、設備の強化と輸送手段の整備という両面から着実に手を打っていった。

図3 マーシャル盆地（2004年6月筆者撮影）
マーシャル盆地はテルライドの北東約4～5マイル（約6.4～8.0キロメートル）、森林限界を越える標高11,500～12,500フィート（約3,500～3,810メートル）に広がる。豪雪地帯で、筆者が訪れた6月にも雪がまだところどころに残っていた。

（注）
1 『Rico Record』1884年5月8日, 2頁.
2 『Colorado Mining Directory』第一版（1883年）, 714頁. 『The Aspen Daily Chronicle』1890年10月18日, 4頁,
3 『The Rocky Mountain News』1883年4月24日, 2頁, 5月19日, 2頁, 1884年1月14日, 6頁, 1月19日, 6頁, 7月18日, 6頁, 8月23日, 6頁, 9月22日, 6頁, 6月11日, 1頁, 7月1日, 7頁, 10月22日, 6頁, 10月29日, 6頁, 11月19日, 6頁, 1886年2月16日, 2頁, 6月18日, 6頁, 『The Solid Muldoon』1883年4月6日, 3頁, 1886年4月23日, 3頁, 6月18日, 3頁, 7月9日, 3頁, 11月19日, 3頁.
4 『The Solid Muldoon』1883年6月22日, 1頁.
5 『Dolores News』1885年12月26日, 2頁.
6 『The Solid Muldoon』1884年10月17日, 3頁.
7 『The Rocky Mountain News』1884年9月22日, 6頁.
8 『The Rocky Mountain News』1885年11月15日, 7頁, 1886年2月16日, 2頁.
9 『The Rocky Mountain News』1886年6月14日, 6頁.
10 『The Rocky Mountain News』1890年1月14日, 9頁
11 『The Rocky Mountain News』1890年3月19日, 9頁.
12 『The Rocky Mountain News』1886年8月20日, 6頁.
13 『The Rocky Mountain News』1889年6月29日, 9頁.
14 1885年には22.5%、1886年には32%の配当が支払われたいう。『The Solid Muldoon』1886年6月18日, 3頁, 12月31日, 1頁.
15 『The Solid Muldoon』1887年5月6日, 3頁.
16 『The Solid Muldoon』1887年7月15日, 3頁, 『The Silverton Democrat』1887年7月23日, 2頁, 『The Queen Bee』1887年7月27日, 3頁.
17 『The Aspen Daily Chronicle』1890年10月18日, 4頁,
18 『The Silverton Democrat』1887年7月23日, 2頁,
19 『The Chronicle & Directory for China,Corea, Japan, the Philippines, Indo-China, Straits Settlements, Siam, Malay States, &c. for the year 1890』191頁.
20 『The Silverton Democrat』1887年11月19日, 2頁,
21 『The Solid Muldoon』1887年5月6日, 3頁. 『The Rocky Mountain News』1890年7月26日, 9頁.

街でみかける ファインスチールの施工例 その61

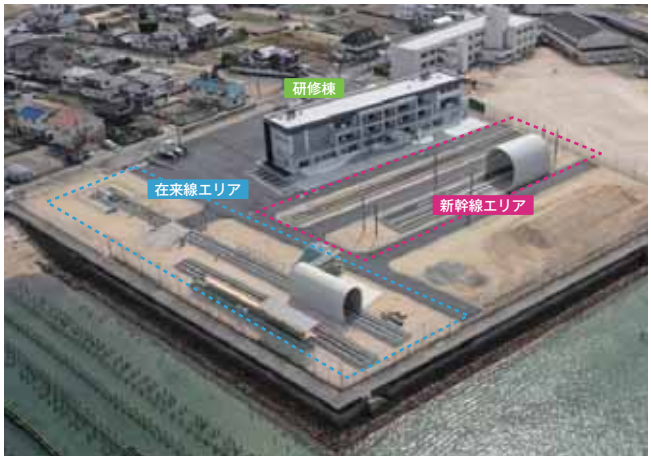
1 行方市立玉造小学校

行方市では、児童生徒数の減少や築40年以上の施設が増加するなど、学校の統廃合が課題となっていたため、適正規模や統合の具体的な組み合わせ、設置場所などを、住民の意見を採り入れながら適正配置実施計画案をまとめた。新設された「行方市立玉造小学校」は、玉造地区の小学校6校を統合し2014年1月に竣工。地域になじむデザインとして塗装ガルバリウム鋼板製の切妻屋根を採用し和のテイストを織り込んだ校舎となっている。スクールバスでの登校となるため安全に配慮しながら屋根のある正門・ウェルカムゲートは雨に濡れないよう工夫。体育館のステージは屋外ステージと連続して設け外壁には木製の格子を取付け「玉をつくる」イメージを穴と重ね格子で表現している。校舎内装は木質化に努め、快適な児童の居場所づくりを心掛けた。

2 広成建設
江田島研修センター ～み・ら・い～

JR西日本グループの広成建設株式会社は創立80周年を機に2022年3月、技術者の早期育成に寄与するため、鉄道関連施設を再現し、実際の現場を体験しつつ技術を学ぶ研修施設として、新幹線の線路やトンネルなどを再現した「江田島研修センター ～み・ら・い～」を開設。廃校となった旧切串中学校を3階建て研修施設にリノベーション。13,000㎡の校庭に新幹線の線路や新幹線分岐器などのほか、在来線のホームや踏切を設けた。

当社では、中学校が廃校になる話を耳にし、未来へつなげる研修センターの立地を決めた。眼下に瀬戸内海が広がる見晴らしも素晴らしく、宇品港や天応港からフェリーが出ており、海上交通のアクセスに恵まれている。研修などで多くの関係者が出入りすることにより、少しでも地域貢献できればと考えている。また、卒業した生徒たちの思い出を残したいと、学校の名前が刻まれた門扉や校歌などは玄関に保管。外付け立体フレーム等の耐震補強を施して、教室の面影をなくさないように配慮したほか、校庭跡に設けた在来線の駅名は地元の小学生から公募。社会見学の場に生かすほか、鉄道ファンらが訪れる施設としても地元の期待は大きい。



FINE STEEL!

ファインスチールは、鉄の長所を最大限に活かしながら、これからの家と暮らしにふさわしい特長を合わせ持つ、現代建築の最適な素材として注目を集めています。新しい住まいで始まる暮らしをより良いものに。
ファインスチールが理想のカタチを実現します。

ボクらの
特長

地震につよい　表面がきれい　環境にやさしい

屋根材・壁材には ファインスチール

FINE STEEL

全国ファインスチール流通協議会

http://www.zenkoku-fs.com

Fine Steel

ファインスチール　第六十九巻　四号
令和七年十月二十五日発行
一、四、七、十月二十五日発行
発行所　一般社団法人 日本鉄鋼連盟　建材薄板技術普及委員会
〒103-0025　東京都中央区日本橋茅場町3-2-10鉄鋼会館
☎03(3669)4815　FAX03(3667)0245